

転生沖田さんの鬼殺譚

卵かけ太郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

トラックに轢かれて神様の趣味に付き合わされることになった転生沖田さんの鬼殺譚

アンチヘイトは一応で付けてあります

目次

第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
62	53	41	33	21	13	8	1

第一話

「ふふついい加減観念してつかまりなさい」

「お断りします、だってお仕置きが怖いですからね！」

「何堂々と言ってるんですか、あなたが薬も飲まずに逃げるのがいけないんじゃないですか」

「だって、その薬苦いんですもん」

追いかけてきているのは、主治医のしのぶさん、追いかけているのは、天才剣士の沖田さんです。

「捕まえたければ、もつと早く走ることですねはっはっはー」

「なら今日の沖田さんのおやつは抜きです、みたらし団子は私が食べます」

「そんなずるいです、鬼、悪魔、第六天魔王」

「誰が織田信長ですか、もう許しません、お団子もあげません」

「ええごめんなさい、謝るから許してくださいよお」

お団子を人質に取られしぶしぶ降伏する

「もういい加減、こどもじゃないんですから、薬ぐらい飲んでくださいね」

「はーい、ごめんなさいしのぶさん」

美少女同士のかわいらしいじやれ合いにも見えるが、実際には違う、片方の中身が転生者で男だったいわゆるTS物である

そんな元男の転生者がここに居るのか

トラックに轢かれて、神様が「鬼滅の刃で百合もの読みたい」とかよくわかんないとを言つて俺をF G Oの沖田総司の姿にして転生させたのである。

しかしながら鬼滅の刃の世界である、鬼にさえ出会わなければいいから、藤の花を大量に植えれば問題ないはずなら。あと自衛のために剣術も練習しておきまいしょう

「おめえ、なんか欲しいものはあるか」

「お父さん、私藤の花が欲しい」

「はあおめえに花なんて似合わねえよ、違うもんは、ねえのか？」

一発パンチを炸裂させた

翌日

母にも同じように頼んでみたら

「あんた剣ばかり振ってるくせに何言ってるのよ、今更花なんて似合わないわよ、もつと別の物を言いなさい」

「、、」

さすがに母親は殴れない、くそお

はあもうだめだわ、剣術を練習しよ

ちなみにこの時沖田さんが自分で探さなかったのは藤の花の名前は知っているがどんな花なのかわらなかつたからである、バカなのである

別のある日

今日も今日とて剣を振って家の周りを走り回る、体のスペックが高いのかみるみる上達するのが楽しくてたまらない。

これまた別のある日

近所に鬼殺の剣士がやってきたようだ名前は、胡蝶しのぶというらしい、ってしのぶさんじゃないですか原作キャラとかエンカウントしたら巻き込まれるじゃないですか。

その日の夕方、しのぶさんがうちに来た、しかも一泊していった、なんでええええ理解した神様のせいだわどうしても原作に関わらせるつもりですかね、ということはこので会わないとそのうち鬼でも来るんですかね、怖いなあ

しのぶさんに会った次の日、鬼殺隊にスカウトされた、両親が強く推薦したらしい
あとうちが、藤の家ってマジですか

もう一度言おうバカなのである、自分の家の家紋すらわからないバカなのである
なんなら親にほしいものを聞かれて庭に生えてる花を答え、照れ隠ししながら言った
父の氣遣いを無視して殴りつけた鬼畜でもある。

「では、試しに打ち込んでみてください」

「はい、では行きますよ」

庭先でしのぶさんと少し間合いを開けて対峙する

「まあ鬼殺隊に推薦するかはさておき、実力は見ておきたいんで、思いつきり来てくださ
いね」

「ええ思いつきり行きますよ」

まあしのぶさんは、柱だし別に本気出しても軽く流されておしまいだと思うし

自分の実力も気になるんで加減無く行きますよお

思いつきり地面を蹴って間合いを詰める、あれ反応がない、どうしよう、思いつきり
振り上げてるから止まんないよ

ガンツ

クリーンヒットである

「わあああああ、しのぶさーん、やばい完全に目を回してます、おとうさーんたすけてー」
なんとかしのぶさんにクソデカたんこぶを一つ作っただけで済んだ。

翌日

「この子は連れて行きますがよろしいですね（ニコニコ）」

クツツ笑顔のしのぶさんに連れて行かれることになりそうです、怖い

「でも私この家をつがないと」

「いらん」

「おまえに任せたら家が潰れるわ」

「料理もできないような子に任せられないわ」

両親が2人揃ってそんなこと言いやがった、なんて親だ

「だったら、おまえの好きなことをやりなさい」

「そうね、好きなんでしょ剣術？」

えっ？

「昔からよく言ってたじゃない、天才剣士沖田さん推参って」

それって転生直後でまだ小さくてテンション上がって、悠〇碧の声出るんだけど、とか思っつて沖田さんのセリフ真似てたときのやつじゃないですか、なんで覚えてるんですか!!

「ふふっ可愛いですね」

しのぶさんもなんかいい笑顔で、弱み見つけたみたいなの顔しないでください

「それに本当に好きかどうかなんて、おめえを見ればわかるよ」

「そうよ、私たちはあなたの親なんですから」

やつぱりそうだ、藤の花が欲しいと言った時もそうだった、確かに欲しかったけどあの時は剣術が楽しくて仕方なかった、だからかくれたものも結局木刀だった、本当にこの両親には敵わないなあ

「やつぱりお父さんとお母さんには、敵いませんね」

「当たり前よ（だろ）」

いつもと変わらない笑顔で言ってくれた

「では決まりましたか？」

「はい、沖田総司鬼殺の剣士になります」

「じゃあ沖田総司さん連れて行きますけど、昨日の一撃は忘れませんかね」
「ええーそんなああ」

第2話

私、胡蝶しのぶは、この隣でお団子を食べニコニコしている沖田総司のことが苦手である、私より力も身長もあつて、剣術も強くて、いつもニコニコと笑い、私が柱になつてもペタペタと引つ付けてくる、私は、そんな彼女が苦手である。

そんな彼女に出会つたのは、まだ私が最終選別を終えて数日が経つた頃で、まだ毒も完成せず調査である村に向かつた時である。

夕方、村に到着して藤の家で一泊することになり、そこの娘が沖田総司だった。

初めは普通の女の子で、私もこの子みたいに鬼狩りもせず両親に囲まれて普通に暮らせればと少し思った。

翌日、その両親から、この子を鬼殺隊に入れてもらえないかと言われた。

なんでも娘は剣術が大好きでいつもと木刀を振り回している、とか言っていたが、正直紹介するつもりは欠片も無かつた、なぜ娘を死地に追いやるようなことをするのか理解ができなかつた。

仕方ないので適当に理由を付けて一回相手してさつさと諦めて貰おう
少し間合いを離し対峙する、あれは確か平正眼の構え？まあいいです

「では、試しに打ち込んでみてください」

「はい、では行きますよ」

「まあ鬼殺隊に推薦するかはさておき、実力は見ておきたいんで、思いつきり来てくださ
いね」

「ええ思いつきり行きますよ」

ドン

えっはやっ

ガン

目が覚めたら翌日になっていました、不覚です、ああタンコブになってますねこれ
「おはようございます、しのぶさん？娘はどうでしたか？」

奥さんが看病してくれたようだ

「正直舐めて居ましたが凄く強いです、お恥ずかしいところをお見せしました。」

「そうですか、では鬼殺の剣士として推薦してもらえますでしょうか？」

正直断りたいが、これは断れないですが理由ぐらい走っておきたいんですなぜ

「それは構いません、ですがなぜ娘さんを鬼殺の剣士にしようと思ったのですか？」

「それは、あの子が一番やりたいことだからですよ」

「一番やりたいこと？」

「鬼狩りをですか?」

「いいえ、剣術ですいつもと退屈そうにして居たあの子が、いつの間にか木の枝を振り回して初めて、しまいには木刀、多分普通の親なら女の子が木刀振り回しているのは止めるんでしようけど、私は止められなかった、あんなに楽しそうにしている総司を見たのは初めてだったから」

「でもだからって、鬼殺の剣士なんてならなくても剣術はできますよね?」

「でも、見たでしょあの子の才能?」

確かに見た、首が切れないとは言え、全集中の呼吸を常中まで取得した私が反応出来ずに倒された訓練もして居ない子に、

「、、、そうですな彼女の才能はすごいと思います」

「そうよ、だからこそ一般人に混じって剣術なんて絶対にできないのよ」

確かにそうですね、この才能の差を一般人は埋めることができない、最終的に化け物呼ばわりでもされて追い出されるのが関の山だ。

「だから私は耐えられないの、大好きな剣術を取り上げられる総司の顔なんて」

そうでしたか、

「ではなぜ私なんですか?ここは藤の家です、他にも鬼殺の剣士はたくさん来ます、なんで新人のそれに首の切れない私なんですか?」

それも疑問だったもつと階級が上の人間に頼んだ方がいいはずですが、私なんて鬼に首も切れない半端もの、だったらなんで私なのか

「あら私は、人を見る目には自信があるのよ、それに努力を惜しまない人は信用できるもの、それに同世代の女の子の方がいいと思つたしね」

ああそれなら納得ですね、娘を男に預けるなんて普通はしたくないもの

「では、受けてもらえるでしょうか？」

「はい、あとは娘さんにお話を聞いてから決めましょうか」

「では、決まりましたか？」

「私は鬼殺の剣士になります」

まっすぐ見つめて答えた彼女、これが私と彼女の出会いでした

「そう言えば、あの時はよくも思いつきり木刀でぶつ叩いてくれましたね!!」

「ええいつの話しててんですか？もう時効です、時効」

「そこで謝罪でも出てくれば可愛げがあるのにこの子は!!」

「だってあれは、しのぶさんが油断しまつくてたのが原因じゃないですか」

「それにしたって思いつきり殴りすぎよ、すつごく痛かつたんですからね」

「すぐ昔の話持ち出すとか年とりましたね」

「へえそんな減らず口減らず口を叩くのはこの口ですかね」

「ほつぺた引っぱらにやいでくだふあい」

「第一同い年でしょ貴方と私」

「すふいふあせん、ゆるふいふえくだふあい（すいません、許してください）」

「まったくもう」

「苦手だけど嫌いになれないそんな私の可愛い沖田さん、ふふっ」

第3話

「はあお団子おいしいですね、しのぶさん」

「そうね、お茶飲む？」

「はい飲みます」

ズズッ

「はあおいしいですね、しのぶさんの入れるお茶は」

「こんなのだれが入れても一緒よ、そういえばそろそろ、カナヲの最終選別よね」
「そうですね、まあカナヲは強いですから大丈夫ですよ。」

「まあそうだけど、そういえば貴方のときはどうだったの」

「私ですか、出入り口で7日間来る鬼を倒したら終わりましたよ」

「ああ聞いた私が間違えだったわ」

「そのあとでしたよね、私が蝶屋敷に来たのは」

「ええそうでしたね、いつの間にか居座って、もう自室まであるものね」

「いいじゃないですか、しのぶも寂しくありませんね」

「もう、自分の家あるんだから出ていけばいいじゃないですか」
「ええそんなこといわなくてもいいじゃないですかあ」

「はあ最終選別が終わったけど、鋳鴉と日輪刀もらったけどいくところないんですよえ」

「総司い、蝶屋敷に向かいそこで待機」

「おや、すごいですね、喋れるなんて」

「もっとほめろお」

「すごいですカラスさん、じゃあ蝶屋敷に向かいますか」

よし、到着

「しーのーぶちゃんあーそびましょ」

家の中からバタバタと音が聞こえる

「ちよつと沖田さん、大きい声で名前呼ぶのやめてください!!」

「しのぶさん久しぶりです」

「もう、どうしたんですか？ 最終選別に行ったとは聞いていたけど生きてたんですね」
「そうですよ、無事生きて帰ってきました、それでその後行く当てがないのでここに来ました」

「えっ育手の人はどうしたの？」

「えーつと初日に女に剣士なんぞ無理だと言われて二日ぐらい我慢したんですが結局ポコポコにして日輪をもらって（奪って）出てきちゃったんですよね」

「ええそんなことして大丈夫なの？」

「大丈夫なんじゃないですかね、ここにはカラスさんに言われてきてますし」

「じゃあお館様も把握してるのねそれなら安心って、ここにいるって暫く居座るの？」

「待機って言われたしそうだと思っただんですが、聞いてないんですか？」

「そうね聞いてないわよ、、はっ！」

何かを思い出したように奥に入っていく

姉さん沖田さんが来るの知ってたわよね

ふふっ知ってたわどつきり成功ね!!

姉さん!!

暫くするとしのぶさんが帰って来て屋敷に通してくれた

「沖田ちゃん、よく来てくれたわ、最終選別お疲れ様」

「はい、ありがとうございますカナエさん、お世話になります」

「はい、ゆっくりして行ってね」

カナエさんとの挨拶を済ませて暫くして

「カナエさんも結構いたずらっ子ですよね」

「そうなのよ、困ったことにね」

しのぶさんと談笑していると

「ああ何でここに、首も切れねえ剣士がいるんだよ、花柱の妹だかなんだかしらなねえけど調子に乗ってるんじゃないよ」

なんか三下っぽい人がやってきた、あれしのぶさんが俯いてしまっている

「しのぶさん？」

「さっさとおまえなんて」「どうでもいいので、その口を閉じてください」はあ

腰に差してるのは木刀ですがまあ何とかなるでしょう

「年下の女の子ぐらいにしか威張れない雑魚が調子に乗らないでください」

「はあてめえ何様だ、見たところ隊士でもないみたいじゃねえか」

「昨日最終選別を突破しました」

「はってめえこそ雑魚じゃねえか、ちよつと教育指導してやるよ」

そっういながら三下さんが日輪刀を抜く

「刀を抜いたってことは、ケガしても文句言わないでくださいね」

「てめえこそ、日輪刀じゃねえからって手加減してもらえと思うなよ」

「まあ御託はいいのでかかって来てください三下」

三下さんが構えをとり呼吸をするが

「風の呼吸「遅いです」がつ」

一歩で間合いを詰めてのどに軽く突きを放ち呼吸を止める

動きが止まったところをボコボコにして計10発ほど叩き込んだところでやめる

気絶した三下さんの襟をもって担ぎ上げ

「これが甲ですか大したことないですね、ちよつとこの人捨ててきますね」

「ちよつと何やってるのよ、こんなの無視しとけば収まるんだから無視しとけばいいの

に」

「でもムカつきましたし」

「何それ、同情のつもり？私が鬼の首を切れないから同情して今みたいなことしたの？」

「へえ？そんなわけないじゃないですか、しのぶさんはそのうち鬼を殺せるようになり

ますよ、だれにもできない方法で、それに同情なんかで戦ったりしませんよ？」

研究してる毒もそのうち完成しますしね

「……じゃあ何だよ」

「そんなの友達をバカにされたからに決まってるじゃないですか」

「なっ、」

「じゃあこの人、外に捨ててきますけど、どうします一発ぐらい殴りますか？」

「(ありがと)」

「えっ何か言いました？」

「いいえ何でもないわ、じゃあ一発やろうかしら」

「おっいいですねえ炸裂させましょ」

バキッ

「ちよつと、しのぶさんそこ蹴飛ばすのはあんまりじゃないですかね」

「そうかしら、蹴りやすかったたし、っていうか何であなたまで青い顔してるのよ」

「いやそれはちよつと、ってこの人泡吹いてますよ、流石にやりすぎです」

「ちよつとどうするのよ」

「えつと、とりあえず医者あああ」

「そういえば、沖田さんがここに来た時、そんなこともあったわね」

「二人してカナエさんに叱られてたけどスツキリしました」

「まあ姉さんもそんなに怒ってなかったしね」

「そういえばカナエさんが怒ってる所とか見たことないですね」

「怒るとすごく怖いわよ、鬼なんて目じやないわ」

「そうなんですか、少し気になるなあ」

「やめときなさいほんとに怖いんだから」

「二人とも何が怖いの？」

「ひゃあ」

「何よそんなに驚いて」

「いや何でもないわ、姉さん」

「はいなんでもありませんカナエさん」

「そうかしら、そういえば二人に聞きたいことがあるんだけど、わたしが買ってきたお団子がないんだけど知らないかしら？」

「ダラダラ」

「(ちよつとしのぶさんこれって今日のおやつじやなんですか?)」

「(いつものおやつ棚に入ってたからそうだと思つたのよ)」

「どうしたの二人とも？」

「いやあ沖田さん訓練があるんで少し失礼します」

「待ちなさい、私も行くわ」

「二人とも待ちなさい」

「、、はい」

「沖田ちゃん口元にみたらしのタレがついてるわよ」

「はっ」

思わず口元を隠してしまう

「間抜けは見つかってたわね、ってことはしのぶも一緒に食べていたわね」

「、、はい」

「正直者は姉さんすきだな、でもなんで初めに聞いたときに隠そうとしたのかなあ」

しのぶさんが言った通り怒ったカナエさんは怖かった

今年18になる大人が団子を食べた食べないでお説教されるのは正直堪えました

第4話

引き続き縁側でしのぶさんとお茶をする

「そういえば2年前突然任務で何日か留守にしたわよね？」

「えっああしましたね」

「あの時いつもは任務であったこと話してくれるのに、あの時は話さなかったわよね」
「そっそうでしたっけ？」

「確か富岡さんと一緒に北のほうへ、行ってたわよね」

「そうですね、あの時は寒かったからよく覚えていますよ」

「何かあったの？（富岡さんと）」

「あーありましたね（あの兄弟と）」

「えっそうなの、大丈夫だった？（沖田さんに手を出したのかあの無口）」

「はい大丈夫ですよ結果丸く収まったので」

「そんな泣き寝入りじゃない」

「そうですね？凄かったですよ、あんなに大きな声を出す富岡さん初めて見ました」
「すごかったんですか…ひどいわ（あの人…次あったらぶっ殺します）」

「そんなことないですよ、筋は通ってましたし」

「でも私は嫌よ」

「しのぶさんは容認できませんよね（鬼のこちらなんて）」

「当たり前よ（そんな不埒なこと）」

「胡蝶しのぶ、沖田総司任務ダア」

「行きますか」

「ええ後でもう一度ちゃんと話してもらおうわよ」

「（あれそういえばしのぶさんあの兄弟のこと知らないはずですよね、まあいいか）」

北の雪道で富岡さんと歩いていると

「富岡さん、寒くないですか？」

「…いや」

「流石ですね、私は早くこたつに入りたいですよ」

「…ならさつさと帰れ」

「なんでそうなるんですか？寒いなら先に帰ってもいいって言いたかったんですか？」

「…そう言ったが」

「そうですか、まあいいですさつきと任務終わらせて温かいお汁粉でも食べに行きましよう」

「があああああ」

「!?!」

「いましたね雲もかかっている鬼が出てくれる」

「…先に行く」

「あつ待つてくださいいよお」

「禰豆子!!やめるんだ!!やめてくれ」

「ううあゝ ああああ」

いけない、でも富岡さんの助けが間に合いますね、おや?

あの子鬼を庇った?

「俺の妹なんだ!」

「それが妹か?」

おお富岡さんと覆いかぶさった状態から鬼を奪い取りましたね、どうやったんでしょ

う？

何か言い合いになってますね？

「生殺与奪の権限を他人に握らせるな!!」

おおびつくりした富岡さんあんな大きな声を出るんですね

聞く限りあの鬼はあの少年の妹のようですが。

おお少年が反撃に出ましたね石と斧うん、うまいですねあれなら死角から斧が飛んできて斧が富岡さんに当たりますね。

あれ当たったらやばいですよね、流石に死にますよね。

そんなことになったら不死川さんとか伊黒さんとかに、何言われるかわかったもんじゃないですね。

石を投げて斧の軌道を変えてあげましょう

ブン

ガン（富岡さんの頭に当たる

「あっ」

少年の動きも止まってしまった

「あっあの大丈夫ですか？」

「…大丈夫だ」

こちらをすごく睨んでいます…ごめんなさい

なんか仕切り直した少年を気絶させた所で拘束していた鬼が抜け出し少年を庇うように立ち富岡さんに向かって行く。

すごいですね…こんなこと初めて見ました

「はあ富岡さんどうするんですか？この二人…」

「…鬼殺の剣士にする」

「はあならお屋形様への報告とかは任せますよ」

「…ああ」

あとはもう内緒にしてあげるつもりでしたけど

「私はさっきの石の借りがあるのでそれで内緒にしてあげます」

「…すまない」

やったー借りがなくなりました沖田さん大勝利!!

「彌豆子!!」

あっ起きましたね

「狭霧山の鱗滝左近次という老人を訪ねろ、妹を日の光に当てるなよ」

「またね〜少年!!」

「あなたは誰だー!!」

うわあびつくりした

「ええそこ引つかかる所ですか!? 私は沖田総司って言いますよろしくね」

「はっはい竈門炭治郎って言います、石を投げたのはあなたですか?」

「ええうっうん、まあ私は先を急ぐからもう行くね」

蒸し返さないでくださいよお

「えっああはい、ありがとうございます」

「うんまたねー」

ここれが2年前の出来事

「あれ富岡さんも任務ですか?」

「ああお館様に呼ばれて来た(なんか胡蝶がすごい睨んでくる)」

「そうですか? いらぬですよ富岡さんなんて(クロスクロスクロス)」

しのぶさんなんか怒ってる?

「まつまあお屋形様が待つてるので行きましようか」

「十二鬼月がいるかもしれない柱を行かせ無ければいけないようだ、義勇、しのぶ、総司」
「〔御意〕」

「富岡さん聞いてますか？」

「…」

「2年前何があつたか聞いてるんですが？」

「何も…」

「最低ですね沖田さんに手を出して挙げ句の果てに知らんぷりですかあ？」

「(手を出す?) なんのことだ?」

「早く行きますよ、那谷蜘蛛山にもう着きますよ!」

「はあ仕方ないですね、私は西から行きます」

しのぶさんが速度を上げて別方向に走っていく。

「ああ」

「私は東から行きますね」

しのぶさんと富岡さんと別れて山を走っているますが…鬼一匹いないんですが!!
そういえば、なんでしのぶさんはあんなに殺気だっていたんですかね

「伊之助必ず戻る生きていろよ!!」

おや今のは炭治郎の声ですね、取り合えずつちに行きますか

ようやく追いつきました

「日の神 神楽円舞」

おお炭治郎くん凄いです見たことない呼吸ですし、十二鬼月を追い詰めていますね。
妹ちゃんもすっかりと炭治郎くんを守ろうとしているようですしすごいですね
でも倒しきれなかったみたいですね手助けしましょうか

立て早く立て!!呼吸を整えろ

「血気術 殺目籠」

ザン

俺を囲んでいた糸が切れた…

誰か来た？善一か？

「よくここまで鬼を追い詰めましたね、すごいです炭治郎くん」

あれは、沖田さん？

「次から次へと僕の邪魔をしやがって 『血気術刻糸輪転！』」

「炭治郎くん大丈夫ですか？珍しい呼吸を使ってみましたねあとで教えてくださいね」

「沖田さん前！前！攻撃が来てますよ」

「大丈夫ですよ」

チンッ

迫る糸が弾けとんだ！

「はあ糸が切られたのか？」

「じゃあ炭治郎くんには、私が唯一持っている型をお見せしましょう」

「型が何だっというんだ」

一歩音超え 二歩無間

「はっ消えた？」

三步絶刀 無明三段突き!!

沖田さんの姿が消えたと思つたら相手の首が消し飛んだ?

「これでおしまいですね、大丈夫ですか炭治郎くん?」

「はい、ありがとうございます助かりました…」

「先ほどの鬼が気になりますか?」

「はい…鬼は悲しい生き物ですから」

「そうですか…やばっしのぶさん!!」

キンツ

「沖田さん?なんで鬼を庇うんですか?坊やその子は鬼なんですよ?」

「違うんです、いや違わないけど妹なんです!」

「そうですか、なら優しい毒で殺してあげますね」

しのぶさんの殺意が半端ないですね、取り合ず二人を逃がさないと

「ああもう炭治郎くん動けますよね、というより動いてくださいね、さっさと逃げてくだ
ゃん」

「はいっありがとうございます沖田さん!!」

よし、取り合ず炭治郎くんは逃げましたかあとはしのぶさんさえ抑えればいいですね

「そこをどいてください沖田さん」

「それはできませんね」

「隊律違反ですよわかつていますか？」

「当然です」

一度助けたからには責任を取らないといけませんよね

「はあもう後で姉さんと一緒にお説教します、あとしばらくおやつは抜きそれで許してあげますからちちゃんと説明してくださいね」

チンツ

しのぶさんが納刀してくれた

「よかった、しのぶさんありがとう」

ダキツ

「なっ／＼／＼でもいいんですか。富岡さんも止めなくて？」

「ああそれなら大丈夫ですよ、二年前の任務から二人のことは富岡さんも知ってます、むしろあの鬼を最初に認めたのは富岡さんですし」

「えっ二年前って沖田さんが襲われたって話では？」

「襲われる？何のことですか」

「(勘違いでしたか、うんうん富岡さんがそんなことするわけないですよね、信じていま

したよ)」

あれなんか機嫌が少し良くなった？

「あつ…しのぶさん大変ですカナヲも止めないとあの子も来てますよね」

「ええそうね鬼は見つけ次第殺すように言ってます、急がないと」

何とかしのぶさんと話し合いで解決して私たちがカナヲを止めようとした先で目にしたのは

「…」

「…」

富岡さんがカナヲをヘッドロックして押さえつけている場面だった

「富岡さん…それはないです」

第5話

ああ柱合会議ですか：憂鬱です

いつもならお館様がお菓子くれたりするんで楽しいですけど今回は怒られちゃいそうなんで行きたくないです。

「はあ行きたくない…」

「沖田さん行きますよ、流石に今回はサボったら殺されても文句言えませんよ」

「うう行つても殺されそうじゃないですかあ」

「大丈夫私がちやんと守りますから！」

神かしのぶさん

「ありがとうししのぶさん!!」だきつ

「(うへへ) いいんですよお」

抱きつかれてテンションがおかしくなつたしのぶさんと抱きつく沖田さんに炭治郎を運ぶ隠しの方もドン引きである

「(えっ 蟲柱様ってそう言う…)」

「おい起きろさっさと起きねえか…柱の前だぞ!!」

炭治郎くんが無理やり起こされましたね

「ここは鬼殺隊本部これからあなたは裁判を受けるんですよ竈門炭治郎くん」

ああしのぶさんが説明してくれましたね

「裁判など必要ないだろう、鬼を庇うなど明らかな隊律違反! 我らのみで対処可能! 鬼もろとも斬首する!」

ああ煉獄さんやっぱりそうですよね、でも隊律って説明されてましたっけその手の決まりごとを記した書物とか見たことないですっけど?

「すいませーんその隊律ってどこに書いてありましたっけ? 私見たことない気がするんですっけど」

「[[[[c?]]]]」

あつこれ全員知らないやつだ

「いや沖田それは派手に常識だろ、鬼殺隊って名前なんだから、鬼を庇うなどやつなど今までいなかっただから」

天元さんが反論してきますっけど

「うーんでも隊律に記されてないなら違反でもなんでもないはずですよ、せいぜい鬼

殺の妨害程度ですけど、お館様が認めていることですよね」

「(珍しくしつかりとしてる沖田ちゃん素敵!!)」

「そんなことより富岡と沖田をどうするつもりだ、胡蝶めの話によると隊律違反は二人も同じだろ、どう処理する、どう責任を取らせる、どんな目に合わせてやろうか」

げっ伊黒さんねっちこいですね、あとしのぶさん助けてくれるんじゃないかなかったですかあ

「(ああ涙目で睨む沖田さん(ちゃん)かわいい)」

この蟲柱自分の欲を満たすために沖田を売ったのである

「まあ伊黒さん二人とも大人しく付いてきてくれましたし、まあ責任を取るのは富岡さんだけでいいですよね、沖田さんは可愛いですから

」

「(それは関係ないだろ)」

珍しく柱の心が一つになった(一部を除く)

しのぶさん何を言っているんですか？

「まあいいや、炭治郎くんしゃべれますか？可能な限り自分の言葉で弁明してください」

「ゲホッゲホッ」

「無理そうですねしのぶさん水とかありませんかね」

「ええありますよ」

そう言いながらしのぶさんが炭治郎くんに水を飲ませてくれた

「顎を痛めてますからゆっくり飲んで話してください、怪我が治ったわけではないので無理はいけませんよ」

「俺の妹は鬼になりましたでも人を食ったりしていません」

おお流石しのぶさん、炭治郎くんが喋れるようになりました、でも皆さんからは辛辣な意見が多いですねえ、

「なら、人を喰つてないことを、これからも喰わないことを、口先だけでなくド派手に証明してみせろ!!」

証明ですか…喰われなければいいんですよ

「沖田さん?」

げっしのぶさんが怖いです

「あのおお館様がこの事を把握してないとは思えないんですが、勝手に処分していいんでしょうか?」

蜜璃さんさすがです!大好き!!

「ああおもしろいことになってるじゃねえか」

げっ不死川さん…ってあの箱炭治郎くんの!!

「不死川さん何やってるんですか？箱をこちらに渡してください」

「（ああ沖田ちゃんのキリツとした声素敵）」

「鬼がなんだって？坊主鬼殺隊として人を守るために戦える？そんなことはなあ、あり得ねえんだよ馬鹿があ」

刀を抜いた？ちっ

キンツ

不死川さんの刃を弾いて箱から逸らす

「はあ短絡的に物事考え過ぎですよ、もっと私の様に色々考えてください」

「（それはない）」

「沖田あテメエ何邪魔してやがる」

「だって不死川さんが勝手なことをするからですよ」

「鬼殺の妨害で隊律違反だなあ、ぶっ殺してやるか？」

「これからその裁判すると言ってるんです、急ぎすぎです」

不死川さんと膠着状態になったが

「お館様のお成りです」

「おはようみんな、今日はとてもいい天気だね、空は青いかな？」

ザツ柱全員が跪く

「炭治郎くんも縛られて辛いでしょうが頭を下げて、お館様が来てますから」
「はっはい」

うん素直で良い子です

そこから不死川さんがお館様に挨拶をして炭治郎くんの説明を要求してお館様から説明が入って、炭治郎くんの育手からの手紙が読まれ

「もし彌豆子が人を襲った場合、竈門炭治郎および、鱗滝左近次、富岡義勇が腹を切つてお詫びいたします」

富岡さんがそこまでしていたとは…すごい人ですね

わたしにはできませんでしたね、ですが！

「ならばそこに私の名前を加えてください、一度助けたのです私も命を賭けるのが通りというものです」

「沖田さん!!ダメです認めません許しませんよそんなことは」

ああしのぶさんの反対がすごいですねでも

「ごめんなさい、しのぶさんでも曲げるわけには行きません後でなんでもしてあげますから今は許してください」

どうか認めてください

「今なんでもって言いましたね、その言葉忘れませんからね(ニコオ)」

あれ流れ変わった？なぜか震えが止まりません

「馬鹿が勝手に墓穴を掘ったが、切腹がなんだと言うんだ死にたいなら勝手に死に腐れよ、なんの保証にもなりはしない」

不死川さんめ！誰が馬鹿ですか！！

「不死川の言う通りです!!、人を食い殺せば取り返しがつかない、殺された人は戻らない」

「確かにそうだね、人を襲わないと言う保証が証明ができない様に、人を襲うと言うこともまた証明できない」

おあ流石お館様言葉がうまい

そこから炭治郎くんが鬼舞辻に遭遇していたことや不死川さんが腕切つて禰豆子ちゃんに血を嗅がせて誘惑とか色々ありましたがなんとかなりましたねよかったです

「炭治郎の話もこれで終わり下がつて良いよ、そろそろ柱合会議を始めようか」
「でしたら竈門くんはうちの屋敷でお預かり致しましょう」

まあ怪我人ですし当然ですよ

そのあと炭治郎くんが変な粘りを見せたが時透くんは石をぶつけられて沈黙したところを運ばれて行った。

その後柱合会議は滞りなく行われしのぶさんと私は蝶屋敷に向かつて帰っていた

「はあ一時はどうなる事かと思いましたがなんとかなってよかったです」

「ほんとですよ、もうあんな事しないでくださいね」

「すいませんしのぶさん、私だってもうあんなのはごめんです。」

「ならもう良いです、そうだ！なんでも言うことを聞いてくれるって話覚えていますか？」

「えっあーはい確かに言いました」

不味いです、どうしよう無茶なお願いされたら

「じゃあ恋人になってください、もう命令なんで拒否権はありません、良いですね」

えっ？

第6話

「じゃあ恋人になってください、もう命令なんて拒否権はありません、良いですね」

私の告白で沖田さんが動揺している、どうしよう断られたら屋敷から出て行くわよね

…

「えっあう…よろしく…お願いします」

俯きながら恥ずかしそうに返事をしてくれたやったわ、姉さん私やったわどうしよう嬉しすぎて死んでしまいそう、ああ長かった…

一年半前に突然沖田さんと姉さんが血だらけで帰ってきたことがある。

それと同時に上弦の弐に遭遇したと隊士に連絡が回った

心臓が止まったかと思った、いつでもいると思つた姉さんと沖田さんが突然いなくなるかもしれないと思うと震えが止まらなくなった。

姉さんと沖田さんは肺をやられて全集中の呼吸ができなくなつてしまつたが生き残

ることができた。

それから直ぐに姉さんは目を覚ましたが沖田さんが全然目を覚まさない

それから一週間経った頃

「うっあああれ…おはよございませす、しのぶさん」

沖田さんが目を覚ました

「おはようじゃないですよ、いつまで寝てるんですか」

心配だった、もう目を覚まさないんじゃないかと、笑いかけてくれないんじゃないかと。

そう思うと目から涙が止まらなくなる

「ごめんなさいしのぶさん泣かないでください」

「いやです、沖田さんが心配かけるからいけないんです、泣き止んであげません」

「あうごめんなさい、なんでも言うこと聞いてあげますから泣き止んでください」

「じゃあ、もう勝手に居なくなったり死にそうになったりしないで」

「ええそれは…はいわかりました約束します」

よかった沖田さんが約束してくれたこれで少しは安心できる

数日後

「しのぶ様沖田さんが病室にいません」

最近家で働く様になったアオイから教えてもらい屋敷中探して道場から音がするこ
とに気がつく

「沖田さん何やってるんですか、まだ安静にしてないとダメじゃないですか」

「あゝしのぶさん…」

「肺がやられているんですから呼吸を使ったら今度こそ死ぬかもしれないですよ？」
「すいません、少し試したいことがあったんで」

「だったら私に聞いてからにしてください、それとも私との約束破るんですか？」

また心配から泣きそうになってしまう

「うっごめんなさい出すから泣かないください」

「次約束破ったら許しません、次破ったら沖田さんを私のものにします部屋から出して
あげません」

「ええごめんなさいもうしませんから許してくださいよお」

「つて約束したはずなんだけど、いつまでたつても直さないしすぐ約束破るんですから」
「ううごめんなさい、でも約束通り私はしのぶさんのものになりましたから許してくだ

「さいね」

「はあもう全然反省してませんね、(本当に監禁しようかしら?)」

「じゃあ早く帰りましょうか、せっかくですから屋敷まで手を繋いで帰りましょうか」

「ええまだ恥ずかしいわ」

「ダメです、恋人のお願いも聞いてくれないんですか? 甲斐性なしはダメですよ」

ギョッ

素晴らしいながら手を握ってくる沖田さんに抵抗せずそのまま受け入れる

「(しのぶさんこんなに想ってくれているとは思いませんでしたね…)」

多分私とカナエさんが大怪我した時からですよ

確かあの時は

「カナエさんどうしたんです?」

「いえ少し先に多分鬼がいるわ」

「すごいですね、私はまだ暗くて見えませんよ」

「私目がいいからねすごいでしょ、」

「へー羨ましいですね、じゃあ先制で倒しに行きますね」

「うーん少しお話しして見たいんですけどダメかな」

「それは必要な事ですかね？」

「さっさと殺した方が安全ですよね？」

「おはなし出来れば分かり合えるかもしれないじゃない」

「カナエさんは優しいんですね、私には出来そうにありません」

「そんなことないわよ、しのぶとあんなに仲良しなんだから優しくないわけないわ」

「ふつつすごい無茶な理論ですね、仕方ないですねあんまり近づかないでくださいね、最悪悪私が出ますから」

「ありがとうございます」

「ねえその貴方？」

「何かな俺に用事でもあるのかい？」

「貴方鬼なのに喋れるのね」

「ああ喋れるよ、なんなら理性もあるそうでなかったら悠長におしゃべりなんてしないだろ」

「カナエさんと話している鬼確かに理性はありそうだけど何かが根本的に壊れている

気がする…

ふと鬼がカナエさんに近づくとダメだあいつはダメだ

急いでカナエさんを掴み後ろに飛ぶ

「おおすごく早いね君あと少しだったのに」

「いっふっ」

「カナエさん？」

なんで何もされてないはずなのになんで血を吐いているのか、あいつまさか…なんで忘れていた、今になって思い出すなんてあいつは上弦の弐しのぶさんとカナエさんを殺す鬼!!

「よくも不意打ちなんてくだらない真似してくれましたね」

「怖いなあすごいきれ気だね」

「カナエさん少し休んでいてください」

鬼に警戒しながらカナエさんを休ませる

「ダメよ…呼吸を使つては…肺が凍るわ…」

「ええわかりました速攻でけりをつけます」

再び鬼の前に立ち

「案外待つてくれるんですね」

「どつちにしても結果は変わらないからね」

日輪刀を抜き

「誠の呼吸一の型 勇（いさみ）」

鬼を挟む様前後から斬りかかるが弾かれる

「ちよつと今分身してなかった？」

「話してる余裕があるんですか？まだまだ行きますよ、誠の呼吸三の型 一（はじめ）」

今度は三方向からの突き技だが回避される

「やっぱり分身してる様にしか見えないね、すごいなあ」

「（攻め切れない…やはり上弦は伊達ではありませんね）」

「じゃあそろそろこつちも 血鬼術結晶ノ御子（けっしょうのみこ）」

一体だけです。が厄介な能力ですね

「チツ厄介な技を（やっぱり速攻で決めないといけなかったですね）」

「どこまで耐えられるかな？」

あの血鬼術の人形かなり強いですねさつきと殺し切らないとゾリ貧になる…

鬼から間合いを離して

「（覚悟を決めますか） 誠の呼吸 終の型 無窮三段」

「（何かしてくる？この間合いなら別に後からでも対処できる構えからして突き技？」）

女の剣士が間合いの外で剣を突き出したと思ったら切っ先が光ったと思ったら俺の首がぼぼ落ちかけていた

「えっ今何したの？」

「(ちっ外した) 最近の日輪刀は光線が出るんですよすごいですよね」

「へえ勉強になったよでもその技反動が大きいみたいだねお陰で気がつかない」
横を見ると人形がすぐ近くにまで接近していた

「しまった…」

なんとか攻撃を弾き間合いを離れたが

「吸い込んだね」

「はいっ」

血鬼術を吸い込んでしまい血を吐き膝をついてしまう

「よく頑張ったねすごいよ、でもここまでだね」

「まだ終わってません、生憎この体血なんて吐き慣れてるんです諦めるなんてありえない」

ですがやばいです、技の反動と呼吸が整わないせいで動けません

「うんでも終わりだね」

鬼が手に持っている武器を振り上げたところで

「風の呼吸壺ノ型 塵旋風・削ぎ」

風の呼吸？誰だろう？

「うあ誰だい君は」

「俺か？俺は「三下さん？ダメです…早く逃げてください」遮んな!!血だらけで死にそんな女を放っておけるか俺はこれでも甲の隊員だしもうすぐ応援も来るから安心しろ」

「ふーん応援がもう来るのか興ざめだなあ今日は帰るね、なんて言っただけ確か沖田ちゃんまた会おうね」

そういうと鬼は去って行った

「三下さん…すみません助かりました…コフツ」

限界だった様でそのまま倒れてそのまま蝶屋敷に運ばれた。

それから一週間後に目が覚めた時しのぶさんに泣かれてしまった。

数日が経った時病室を抜け出して全集中の呼吸をしようとしたが無理でしのぶさんにバレてまた泣かせてしまった

その後正式に柱から外され数日が経った時

「カナエさん少し相談があるんですが」

「どうしたの沖田ちゃん？」

「戦線に復帰するにはどうすればいいかですかね」

「そんな!! 無理よ沖田ちゃん」

「無理でもやらないといけないんです、そうしないとしのぶさんが殺されちゃいます」

「しのぶが殺される？」

「はい、しのぶさんのことです私とカナエさんのためにきつと無茶をします、自分の身を犠牲にするのも厭わないかも、だからそんなことさせたくない私が守りたいんです」

「ごめんなさい、あの時私が話をしたいなんて言った所為でこんなことになって」

「それはもう済んだことです、私も了承した結果ですから仕方ありませんですからどうか私に戦う力をください」

「…わかったわ、でも今まで見たいな動きはできないし型も多分一つも使えないわ」

「それでも教えてください」

「ならそうね、肺に負担がかからない範囲で小さく薄く全集中の呼吸を行うの、でもほとんど呼吸による恩恵もないし、呼吸を使った型なんてまず使えないわよ」

「十分ですありますがとございますカナエさん」

「ええでも無茶だけはしないで、あとしのぶのことよろしくね」

「はい任せてください」

そのあと結局誠の呼吸はできなくなってしまったが、それとは別に肺に負担のかからない桜の呼吸の呼吸を会得して見事に戦線復帰を果たし。

そこから半年後

「この度桜柱を襲名致しました、沖田総司以後よろしくお願い致します」

ちなみにこの時襲名するのを内緒にしてドッキリを仕掛けたら、またしのぶさんに泣かれた

「あのしのぶさん、私はしのぶさんのものですけどしのぶさんは私のものですか?」

「そうね私は私のもよ」

「ええズルイです私もしのぶさんが欲しいです、ください!!」

「そんな人をもの扱いする人にあげられませんね」

「自分のことを棚に上げてこの人は…じゃあ所有者のしのぶさんは私を置いていなくなるらないと約束してください、いつでも一緒です」

「ええそれなら約束してあげる、絶対離しません覚悟してくださいね」

少し握っている手が強くなった気がする

「ええ約束です、いつでも一緒ですから離さないでくださいね」
私も握り返す

離しません二人で一緒にいるために…

あいつは絶対に殺します

第7話

「姉さんやったわ!!総司をものにしたわ!!」

嬉しすぎて沖田さんと一緒に帰って来た後すぐに姉さんに報告した。

「あらあら、よかったわね。ずっと頑張って来たものね」

「うん、本当に嬉しいわ、だから鬼殺隊をやめようと思うの」

「えっ?何で急に」

「沖田さんと一緒に生活して、もう危ない事もしたくないしさせたくないわ」

「うんいいじゃないかしら。姉さんも賛成するわよ、早く幸せにならないとねしのぶは」

「ならカナヲもアオイもナホもキヨもスミもみんなでやめて静かに暮らしましょう」

「うーんそれだと蝶屋敷が無くなって、みんな困ってしまうんじゃないかしら」

「なら隊士はやめる、もう戦わないし戦場にもいかないわ」

「沖田ちゃんが納得してくれるかしら?」

「泣き落としでも何でもするわ」

沖田さんの認識ではしのぶさんは鬼を殺すためなら何でもすると思っっているが違う。

この世界ではしのぶさんは両親を鬼に殺されて鬼殺隊に入っているが殺した鬼は悲

鳴慈さんに殺されているため仇はもういないし、姉と恋人が生存しているため復讐する相手も別にいないならさっさと辞めてみんなで平和に暮らしたいと思っっているのである。

「じゃあやめようと思っっているなら、しのぶは何の研究を夜な夜な、しているのかしら？」

「そうね強いて言うなら生える薬かしら」

「生える薬？」

首を傾げるカナエ考えるカナエだがよくわからなかった。いやわからなくていいけど

「(ビクウ) 何でしょう急に寒気がしましたね」

「(コテン)」

首をかしげるカナヲ

「ああカナヲすいません、訓練の続きをしましょうか」

しのぶさんと帰って来た後少し時間があつたのでカナヲに付き合っ

打ち込み稽古をしている

「じゃあ続けましょうか。」

「(コクン)」

少し間合いを離れた地点から再びカナヲが接近して木刀を振り上げる。

カナヲの連撃を 捌き 弾き 受け流し

「(コクン)です!!」

カナヲの上段からの振り下ろしを柄頭で弾き、そのまま首筋に剣を添える

「うんいい感じでしたがまだまだです!!」

「(むうー)」

「(おや、珍しくカナヲが膨れてますね)ふふっ悔しかったらもつと鍛錬を積む事ですね、でも強くなりましたねカナヲ」

カナヲの頭に手を乗せ撫でてあげる

「もうこんなに大きくなりましたか成長が早いですね、しのぶさんとは大違いです」

「大きくならなくて悪かったわね」

「げっしのぶさんが聞いてました?」

「それを答える必要がありますか?」

「…すいません」

「じゃあカナヲ少し沖田さん連れて行くわね」

「(コクン)」

「じゃあカナヲまた鍛錬しましょうね」

「沖田さん相談があるんだけど」

「はい何ですか？」

「鬼殺隊と一緒にやめてくれないかしら？」

「えっしのぶさん今何て言いました？」

「鬼殺隊を私と一緒にやめてほしいって言ったの」

「ごめんなさいそれはまだできません……」

「何で？ 沖田さんは鬼に対する復讐心とかで戦ってないわよねなら……」

「そうですね私はしのぶさんがやめるならやめてもいいと思っていました、見届けないといけない人が出来てしまいました」

「それは竈門くんの事かしら？」

「ええ一度鬼を助けてしまった責任を取らないといけませんし見届けないといけません」

「私が大泣きしたら考え直してくれる？」

「ごめんなさい……できません」

「もう結局こうなるのね…わかりましたもう言いません。」

「すいませんしのぶさん」

「今度何でも一つ言うこと聞いてもらいますからね」

「ううわかりました」

「よしあとはあの薬を完成させてしまえばこっちのものね）言質とりましたから忘れな
いでくださいね」

「（ビクツ）また寒気が…」

沖田さん油断するな彼女は辞めさせることをカケラも諦めていないから気をつけろ

!!

「あつ炭治郎くん機能回復訓練は捗ってますか？」

「あつ沖田さん！それがカナヲに全然勝てなくて…」

「うーん常中の訓練はしてるんですよね？」

「はい、でもなかなか身に付かなくて…」

「そうですか…まあ私は常中はもうできないんで教えられませんが、言えることは鍛錬

あるのみですね」

「えっ沖田さん出来ないんですか？」

「ええ肺を痛めてしまつてからできなくなつてしまいました。」

「そうなんですか…（えっこの人常中もなく下弦の鬼をあんな簡単に倒したんですか!?!）」

「まあ無い物強請りは仕方のないことですからね、そうだ後で打ち込み稽古でもしてみますか？」

「えっいいんですか！ぜひお願いします!!」

「じゃあ好きに打ち込んで来てください。私はここから一步も動かないので」

「では行かせていただきます」

『ダン』と強く踏み込み沖田さんには木刀を振り下ろすが

「うんいい踏み込みですがまだまだ甘いですね！」

振り下ろした木刀を沖田さんが受けたと思つたら…視界が反転して床を転がる俺

「（えっ今何が起こつた?）」

「炭治郎くんダメですよ、体制を崩されたら早く立て直さないと…死んでしまいますよ?。」

慌てて上を見ると『にっこり』と笑顔で木刀を振り上げる沖田さんがいた…
「あつ死んだ…」パコーン

「あれ俺確か打ち込み稽古の最中で…」

「ああ起きましたか炭治郎くん、大丈夫ですか？ 幸いコブにはなっていないようなので問題ないとは思いますが、どこがおかしなところはありますか？」

「しのぶさん、はい大丈夫です。ところで沖田さんは？」

「ああ沖田さんはあそこです」

『私は怪我人に打ち込み稽古をさせて頭に木刀を叩き込んだ愚か者です』

と書かれた板を首からかけてズーンと正座させられていた

「俺も納得してやったことなんで許してあげられませんかね？」

こちらを見て明るい表情になる沖田さん

「ふふ炭治郎くんは優しいですね、でもダメです彼女があの手の手加減を失敗したのは2回目なので許しません」

聞こえたのか再びズーンとする沖田さん

「2回目ですか…」

「まああと半刻もすれば許してあげましょう、炭治郎くんも今日はもう休んで明日に備

えてくださいね」

「はいわかりました!!」

「うわーんしのぶさーんそろそろ許してくださいよお」

そろそろいいですかね

「わかりましたもういいですよ?早く立て下さい」

「やったーようやくおわりまつ…」

ふふっ準備万端ですね

「どうしました?」

「いえ…何でもありません、ちょっとそんなニコニコしながら近づいてこないで下さい

!!今はダメです本当に」

「ふふっしーらない」

っん

「ひゃああ、だめですう本当に今敏感なんで触っちゃダメエ」

「(ああいい凄くいい) どうしたのかしら?」

っんっん

「んあああダメエもうやめてひやう！いやあああああ
痺れた足をつんつんしただけ！実際健全！！」

「ぐすんぐすん…」

「ああ沖田さんごめんなさい（ああ可愛い！！可愛い！！）」

その後軽くガチ泣きした桜柱を宥める蟲柱の姿がそこにはあった

第8話

俺は善逸、早々に機能回復訓練を諦めて台所に忍び込みお饅頭をちよろまかしている
「あつ善逸くん何やつてるんですか？」

「えっえーつと」

やばいバレた

「おおお饅頭ですか、いいですねわたしにも分けて下さいよ」

あれ気づいてない？

「えっええどうぞどうぞ」

「わーありがとうございます!!では早速、あむ」

よっしやー共犯だー

「食べましたね」

「?ええ食べましたよ…まさか!!このお饅頭!!」

「ええこの棚の中に入ってたものですからからね!!怒られるときは一緒ですよ!!」

「ああー!!何てことしてくれたんですか!!よりにもよってカナエさんのじゃないですか

!!」

「えっカナエさん？あの人優しい感じだからむしろ助かったじゃないですか？」

「もうおバカ!!カナエさんに怒られたことないから言えるんですよそんなこと!!」

「沖田さんは怒られたことあるんですね…」

「もうやばいです、わたしはしばらく身を隠しますでは!!」

「あら沖田ちゃんそんなに慌ててどこへ行くのかしら？」

「ひいカナエさんごめんなさい許して下さい、わたし知らなかったんです」

「あらあらどうしたのかしら？」

「カナエさんのお饅頭食べてしまいましたってすいませんでした」

「なんだそんなこと？別にいいわよ」

「あれ？怒らないんですか？この前はあんなに起こったのに…」

「あれは食べたのに隠したりしたからよ、お饅頭の一個や二個で怒ったりしないわよ」

「ごめんなさいカナエさん…」

「なんだやつぱりカナエさんは優しいじゃないですか」

「あらあら、でも善逸くん？最近台所から食べ物がなくなることが多々あるのだけれど

心当たりがあるかしら？」

「えっ？」

その後カナエさんにしっかりとお説教をされて割とガチで反省して訓練に参加する

ようになつた

「おおアオイちゃんお疲れ様です!!」

「あつ沖田様お疲れ様です」

「様付けは恥ずかしいのでやめて欲しいですね」

「「あつ沖田様」」

「おおナホ、キヨ、スミ今日も元気にですね!!これから洗濯ですか?」

「「はい!!」」

「四人ともいつもありがとうございます」

「そんな沖田様の活躍に比べれば…」

「いいえアオイちゃん達が出来ることを私は出来ませんから、両親からわたしが家を継いだら家がなくなると言わしめた女ですからね!!」

「自信満々に何を言ってるんですか?」

「だからそれだけ凄いことをしてくれているんですから自信を持って下さい!特にアオ

「イチちゃん!!」

「そうですかね…」

「そうですよ! じゃあ頑張ってる三人にはご褒美に飴玉をあげましょく」

ナホ達三人の手に飴玉を乗せてあげる

「わぁありがとうございます。沖田様!!」

「じゃあアオイちゃんもアーン」

「わたしにも普通に渡して下さいよ!!」

アオイちゃんから抗議の声が上がるが…

「アーン」

折れない!!

「…あーん」パク

観念したのか受け入れてくれる

「ふふっやつぱりアオイちゃんは可愛いですね、昔のしのぶさんそっくりです」

「しのぶ様とですか?」

「ええ今では少し丸くなりましたけど昔はツンケンしていていつも蝶屋敷で大きな声を

出していましたね」

「あのしのぶ様がですか? でもわたしには今のしのぶさんの様にはなれそうにありません

んね…」

「そんなことありませんよ、もしかしたらアオイも好きな人とか出来れば変わるかもしれないですね」

「なつもうからかわないで下さい!!」

「ふふっ 揶揄つてませんよ。なんてつたて実体験ですからね」

「楽しそうな話をしてるわね沖田さん？」

「げっしのぶさん…ちなみにどこからいましたか？」

「アオイに昔のわたしの話をしたところぐらいですかね」

「怒ってます？」

「いいえそんなことで怒る私ではないですよ？」

「そうですかよかったですー「天才剣士沖田さん推参!!」えっちよつと!!」

「でしたっけ？可愛いですよね小さい時よく木の枝振り回しながら言ってたんですよ？」

「あー!!なんでみんなにバラしたんですか!!」

「だってわたしだけバラされるのは不公平じゃない？」

「だからってよりにもよって…」

そこから完全に二人の世界に入ってしまう

「あつもしかしてしのぶさんの好きな人って！」

「うんそうだよねきつと」

「凄いね素敵だよ」

「ああそういうことなんですネ…」

今回の痴話喧嘩でナホキヨスミとアオイにバレて静かに祝われた

カナヲはまだ知らないぞ

機能回復訓練の合間

「沖田さんとしのぶさんって付き合ってるんですか？」

「あれ？なんで炭治郎くんが知ってるんですか？」

「いや二人一緒にいる時の匂いが両親と一緒にいる時と似てたので」

「すごいですね、匂いでそんなことまでわかるんですか」

「多分善逸もわかったますね、耳がいいので多分その辺理解してると思いますよ、伊之助はどうだろうっ？」

「あつ数字!!しのぶが読んでたぞ!!」

「あつ伊之助くん、わたしは総司なんですが、まあありがとうございます」

「たくつ番（つがい）を待たせんよ」

「えっ伊之助くんもわかるんですか？」

「あたりねえだろ俺様に分からねえことはねえんだよ」

「へえ凄いですね伊之助くんは」

「凄いぞ伊之助!!」

「おうもつと褒めろ!!」

「じゃあわたしは行きますね」

「おう!!」

「行つてらっしゃい」

現在屋敷で二人の関係を気づいていないのはカナヲだけである!!

カナヲだけである!!

「しのぶさん何か用事ですか？」

「ええ今炭治郎くん達に常中の訓練をしてもらっていますが終わりに次第任務に出てもらうことになっています、その任務に私か沖田さんのどちらかが煉獄さんとともに同行することになりました。」

「そうですか…なら私が行きましょう、しのぶさんには蝶屋敷を守って貰わないといけ

「ませんからね」

「私が行つてもいいんですよ？」

「いやここは私が行きます、私の帰ってくる場所を守ってくださいね」

「はい、任せてください（何今の夫婦みたい!!）」

「ふふっ今の夫婦の会話みたいでしたね」

「そうね…でもまだ夫婦じゃないので恋人同士っぽいことしましょうか」

「何ですか？恋人同士っぽいことって」

「こういう事よ（チュッ）」

急に近づいて接吻されたのである

「なっいきなりずるいです！」

「ふふっ油断してるからよ」

「よくわからなかったじゃないですか!!初めてだったのに…」

「じゃあもう一回してあげるわ」

「…はい」

「じゃあ目を瞑って」

「はい…」

チュッチュパレロチュパ

「 (!! さっきのやつと全然違うじゃないですか) んっふあああ」

「 (えっ 師範と沖田さんが接吻してる? なんで??) 」

たまたま通りがかって師範とその友達の逢引を目撃してカナヲ遂に理解

「 (沖田さんのおふざけかしら?) 」

せず!! カナヲ!! 理解せず!!

沖田さんの普段の行いのせいで判明せず気づけないままその場を立ち去る!!

「ふうふう…しのぶさんさっきと全然違うじゃないですか」

「今日はここまですけど、今度はもつと凄い事するんでこの程度で根を上げないでくださいいね?」

「うう今から不安です…」